

里親との出会い

——ある知的障害者とされた青年の「語り」より——

深 谷 美 枝

1 はじめに

本論は筆者の前論文⁽¹⁾に続き、軽度知的障害を持つ「当事者」とされる⁽²⁾中村隆君(仮名)の語りを取り上げたものである。中村君は自分の物語を語ることによって意味を再構築する「ナラティブアプローチ」的支援⁽³⁾を受けている最中であり、現在も同グループホームでの各種実習や教育機関での授業で進んで自らの体験を語っている。中村君の略歴を再掲すれば以下のようである。

両親からの虐待により3歳で児童養護施設ひかり学園(仮名)に入所、16歳まで同園で育った。中学までは普通学級で過ごし、高校の時自らの意志で特別支援学校高等部に進学する。16歳の時ひかり学園から逃亡し、児童相談所に保護され、施設側の再三の説得にも応じることなく、一時保護所で1年間生活した。17歳から里親加藤さん(仮名)の家庭で1年間生活する。18歳で特別支援学校卒業と同時に里親加藤さんの勤務する現在のグループホームでの生活を始める。学校からの紹介で大手の外食産業チェーン「うめや」(仮名)の特例子会社で働き始めるも、パワハラから1年で適応障害の診断を受け退社、生活保護を受給開始する。現在就労支援センターの支援を受けながら、就職を含めて進路を模索中。傍ら子ども食堂でボランティアをしながらリハビリに努めている。

前論文においては、何故中村君が「知的障害」とされて生きているのか、が筆者の関心の焦点であった。彼の「語り」によれば施設特有の組織構造の中、信頼関係の作れない職員との間で、日常的に精神的・身体的虐待、あるいはグレーゾーンの支援を受け、極度のストレスを感じ、日常的継続的にストライキを実行してきた。ストライキが反抗期に至ってエスカレートしてしまい「暴れる」なかで、殆ど施設からも中学校からも進路について説明や適切な情報提供がなされないまま、限られた仲間うちの情報だけを頼りに、将来に対するはっきりしたビジョンも持つことができずに、職員からの虐待的支援を回避するという消極的な理由で、より安全な進路である「特別支援学校」を自ら選択した、あるいはする形になったということになる。

本論では彼の「語り」のうち、特別支援学校入学から、16歳の児童養護施設からの逃亡、児童相談所の一時保護所の経験、里親との出会いと1年間の生活を中心に上げる。筆者の関心は現在に至るまで「知的障害者」とされて生きることを肯定している彼にとって、それぞれ社会的養護の諸施設・機関がどのように経験されたかということであり、その経験がどのように彼のアイデンティティーを形作っているか、である。

面接は非構造面接で自由に語って貰った。ただし、面接5回のうち1回はグループホームの施設長Sさんが立ち会っていて会話にも登場している。そのことも含めて本インタビューは冒頭に記したようなグループホームにおける支援構造から自由ではないことを記しておきたい⁽⁴⁾。面接は逐語記録として起こされ、時系列に従って中村君の「語り」として整理されている。

本論の視点として改めて述べておきたいのは①当事者である中村君は一見個人である中村君を指しているように見えながら、実は中村君を取り囲む状況や環境性をも含む存在であること、②中村君の語る社会的現実はいくまでも彼にとっての現実であり、必ずしも客観的な「真実」とは限らないし、真偽を超えたところに中村君の真が見えてくること⁽⁵⁾、③福祉施設や機関は利用者と職員

の物語の会合である、ということである。

当事者である中村君はグループホームでの支援の中で自らの経験を意識化し、言語化している。語られる経験はそのような構造の中にあり、「語り」はすでに彼の「物語」とグループホームの支援の持つ「物語」との出会いの中で生まれつつあるものである。

2 中村君の「語り」から

(1) 特別支援学校での幸福な生活

自ら選択してC特別支援学校の高等部に入学した中村君はどんな学校生活を送ることになったか。それは自由でのびのびした生活であり、「学校の時間が一番幸せ」というくらい幸福感を感じられる時間だった。障害の程度が軽い人も多かった。

与えられた自由の中で中村君はバスケットの練習に打ち込んでいく。授業をさぼって給食も食べないほどにバスケットに夢中になり、始めて1ヶ月でスタメンになるくらいであったという。

高校に入ってからバスケットに目覚めたんですけどバスケット大好きで、ずっと身体動かしていたかった。高校に入って授業最初は真面目に受けていたけれど、だんだん授業も出なくなって、ずっと体育館でバスケットやってた感じ。朝学校行ってHR前はずっとバスケット、HR出たら1時間の授業、興味なかったら体育館行ってバスケット、他のクラスが使ったら、どこかでボールいじって遊んだり、授業でながらボールいじって遊んだりして。給食、学校の給食って味付け薄いで美味しくないんです。施設が食事にこだわる方で、美味しかったんです。野菜とかもすごく美味しかったんです。だから学校の給食が美味しくなくて。味薄いし、食材もまずいし。デザートとパンが

出ている日以外は全く食べなかった。だから給食の時間はずっとバスケ。人がいないんで体育館独り占めなんです。他の人は相手にならないので、ずっと1人。始めて1ヶ月くらいでスタメンでしたし、運動神経結構良かったかも。部活では1人でやるしか。朝練とかも、自分を酷使していた。

(2) 家族との再統合の失敗

中村君は虐待を受けて3歳の時に児童養護施設に入所していた。しかし、その記憶は全くなく、中学の時に初めて親と再会することになったが、前後して緊急保護した児相のワーカーであるAさんと会い、虐待の事実を知らされることになった。事実を知った時に恨みたかったという。突然会いに来た父親だったが、特別支援学校に入学すると来なくなった。それについて彼は働き手として父親は経済的な期待を持っていたが、それが障害者であるということが分かったために期待を裏切られたからではないか、と感じている。

父親の顔も、中学の時初めてみたくらいですし。全く覚えてなかったですよ。衰弱していたっていうのもあって、記憶が欠落していたのかなって。

知りたいなあ、と思って。A先生(緊急保護した児童相談所ワーカー)と話す機会があればいいなと思って。1回だけ知先生と会ったんですけど、自分が、「え？そう(虐待で保護された子ども)なんですか？」みたいな。状況が理解できていなかったんで、聞きたいことも聞けなかった。なんで父親が会いに来たのか、本当に謎でした。深まっていきました。多分働き手として、入れたかったんでしょうね。金が入るっていう。子ども3人いたんで、生活的に考えて。多分そうだと思うんです。高校入ってから結構考え込んで、会いに来なくなったのはなんでかな、自分障害だしな、じゃ普通校行ったらどうなっていたかな、って。

(3) 施設の中で強くなるストレス

学校でのストレスの少なさに比して、施設では職員の顔色を窺って生活していて、相変わずストレス状態が継続し、増大していった。ストレス発散が上手くできず、物に当たる壊す等で発散していく。

施設内では高校生だったんで、面倒くさいなって。だったらこっちが顔色窺ってればいいやって、顔色窺って生活してたんで、職員からそこまでないんですけど、扱いとしてはほぼ「空気」でしたね。

自分はとても(ストレス発散が)下手でした。友達と話している時は忘れるんですけど、無駄に記憶力がよくて、ストレスたまったことについては確実に覚えているんですよ。嫌なことは覚えている。楽しいことも覚えてるんですけど、それよりも嫌なことを覚えている方が多くて。それに対して腹立って、思い出シライラみたいな。何であの時俺は謝ったんだろみたいな。俺謝るところじゃないだろうみたいな、そこでまた、イライラして。

なんか過去の自分を振り返れ、自分を見つめ直せみたいに職員に言われた時に、「悪くねえじゃん、俺」みたいなときにもイライラして、とにかくストレスの発散方法がよくなかったですね。出来なかったんですよ。運動してガムシャラに発散しようとしていたんですけど、やっぱり残るんで、そこでもイライラするし。疲れているんでまたイライラが増すみたいな。風呂とか入ってすっきりしよう、デモ全然取れないわ、みたいな。ぬいぐるみとかサンドバッグでもなぐってようみたいな。とにかくストレスの向かう先がなかった。神経質だったんですかね。顔色窺ってたんでちょっとのことでもイラっとして。子どもの面倒見るのが好きなんですけど、子どもがちょっとうるさかったりするとイラっとして、煩いなみたいな。

(4) 万引きの疑いをかけられて施設を飛び出す

ストレスが増大していく中で、中村君は万引きの疑いをかけられた。そして塾に行くとは偽って無断外出して友人宅を転々、学校の教員の勧めで施設に戻らず児童相談所に自ら行くことにした⁽⁶⁾。1年生の終わりのことである。

F 施設を出たのは、なんでだっけ？

A 脱走。抜け出したのが原因なんですよ。友達とのやりとりで物をもらっていて、職員に申告していなかったんですよ。そしたら、職員が勝手に万引きだのなんだのって言ってきて。

F 万引きだって言いがかりをつけられちゃった。

A 脱走の原因となったのが、友達と書店行ったんですけど、友達が万引きしちゃって。ちょっと来い、と言われるまま行ったのに、俺犯人扱いされちゃって、それで嫌になって。友達の家をはしごしていたんですけど、学校の先生に見つかって。「施設に戻るか、児相に行くか、どっちか選びな」って言われて。高校1年の終わりか2年の最初くらいですかね。

F 無断外出だよ。学校の帰りにいなくなっちゃうとか。

A 公文に行かされていたんですけど、それがめんどくさかったんで、サボってて、友達と遊んでたのがアレですね。学校から帰って公文とか行く。実際もう、勉強とか必要ないでしょ、みたいな。最初は真面目に行ってたんですけど。周りは子供ばっかなんで、行くのもめんどくさいし、いっかな、みたいな。

無断外出は発作的なものであり、計画性はなかった、という。誤解される理由については本人分らず、職員のストレスのはけ口にされていると感じていた。

F 誤解されてるってのが多いよね。なんで誤解されるんだろうね。

A わかんないですよ。目の敵にされるんですよ。ストレスのはけ口なんですよ。自分が暴れることがないからでしょうね。ちょっと強めに言っても大丈夫なんだろう、みたいな感じでしょう。切れることはあっても人には当たらないし。かといって暴れると疲れるんで暴れたくないんですよ。怒っても疲れるですけど、暴れるよりは疲れないですかね。

F 無断外出って、結構思い切ったことじゃん。計画があったのか、発作的なのか。

A 発作的ですね。突発的に。もともと施設に帰りたくない、いろいろストレスが重なりすぎちゃって。あそこには戻ってもいいことないし、楽しくないし、この先後悔しかないんじゃないかなみたいな。で、出ちゃいましたね。

F 事件があっただけでなく、降り積もったものがあった。

A 誤解のストレスがたまっちゃうんで、誤解受けて気分いい人いないと思う。

この経験は施設から見れば「無断外出」であり、大きな問題行動である。しかし、本人の側から見てみれば誤解され、無実の罪を着せられ、解消できないストレスが積み重なって窮地に陥った時に、このままでは後悔しかないので後悔しないで済むように施設を出よう、出て人生をリセットしようというある種の決断であり、計画性はないというものの、一つの意志決定であった。また単に無断外出して終わりではなく、きちんと支援学校の教師のアドバイスを聞き、社会資源としての児童相談所に自らつながることが出来ている。この辺りに中村君のストレングスを見ることが出来る。

(5) 一時保護所の生活

① 保護所の生活

ひかり学園を出た中村君は1年間一時保護所の生活を送ることになる。長期

化傾向を指摘される保護所の入所期間ではあるが、1年間というのはかなり突出して長いほうである⁽⁷⁾。一般に規則が厳しく管理性が強いことが指摘される一時保護所ではあるが⁽⁸⁾、中村君にとっては「暇なところ」であり、職員との関係性もよく、施設に比べてストレスのかからない生活であったようだ。

F 一時保護所って子どもにとってどういうところ？

A とにかく暇なんです。1日1時間くらい勉強の時間、遊びの時間も1時間あるんですよ。お風呂の時間もそのあとで決められていて、スケジュール通り。勉強、遊び、お風呂以外は、特に何もない。室内にいて、漫画とか読んで。テレビもあるんですけど、1人2つまでこれを録画してほしいというのをあらかじめ言っておかないと録ってくれない。人がいっぱいいると録ってくれない。1年もいたんで漫画も全部読んじゃって。することがない。じゃあ手芸やろうって。

F え、手芸なんてやるの？

A もともと結構好きで、マフラー、編み物。謎の女子力がさらに磨きがかっちゃった感じで。することがなくて、とにかく暇。ほかの子と話しちゃダメだったんですよ。職員の人とも仲よかったし。私物持ち込み禁止で、私服もダメなんです。児相で用意された服を着る。月に1回外に出かける時があって、その時だけ私服解禁になって。

F その服って古いの新しいの？

A 結構いろんな子で使い回しなんで。綺麗ってわけでもなく。汚いわけではないけれど。

F 1年って長いの？

A 長いですね、俺より長い子はいなかった。長い子もいたんですけど、すぐどこか行って。職員と仲良くなっちゃって。理事さんとおかし作りとかして。

② 児童養護施設側の説得をどう感じていたか

最初のうちは施設に戻りたくない、という中村君の意志は尊重されていたが、兄相の担当ワーカーが代わることにより、無断退所したひかり学園と連絡を取って再三再四兄施設に戻るようにアプローチがなされた。中村君には一切相談なしに職員の判断で面会を組んだり、部屋に施設職員を勝手に入れて2人きりにして、4、5時間も戻ってくるように強い説得がなされた。

F 兄相の保護所に1年いて、次どうするか兄相の人たち考えていたんだよね。

A 自分まだ施設出たことになってなかったんです。施設に戻そうとして、施設の人がたまにくるんですよ。自分にとっては負荷でしかなかったんです。ストレスたまるだけの時間帯で。

F 高校の途中で保護所から出ていくというはあまりないじゃん。またひかり学園に戻って？

A 最初は、兄相の人も、戻りたくないよね、という話を聞いてくれていたんですけど、担当が2人変わっちゃったんですよ。今はCさん、その前がBさん。Bさんがめんどくさいタイプの人で。勝手に面会組んだり。部屋って勝手に入っちゃいけないですよ。平気で入れたりとか。職員と2人きりにしたりとか。嫌な奴だったんですよ。あと勝手なんですよ。なんでもかんでも相談なしに。第三者が勝手に決めていいことではないはずなのに。勝手に決めて、勝手に面会組んで。勝手に怒らせて。「この職員が原因だ」みたいな感じで、また面会組んでくるんですよ。

F ひかり学園の人との面会？

A そうですね。部屋に連れて来た時は大変でした。面会時間は決まっていなかったんですが、実際部屋の中に4、5時間居座られたんですよ。職員は「戻ってきな」俺は完全無視でしたね。

それは事前の打診もなく意志に反して行われたので、中村君は強いストレスに晒されて自分の部屋の壁を叩くような破壊衝動に襲われた。自分の手が血まみれになるほど物を壊し続け、4、5時間部屋に粘られた時には拒食状態に陥り、自律神経失調のような状態だったという。担当者の交代により方針が転換されて、その働きかけは終焉した。

A それ(ひかり学園職員との面会)のせいでイライラが募り。児相内で暴れかけたりして。ドアとかあと一歩で破壊みたいな。

F 今話聞いていると、信じられないんだけど。

A 結構、破壊衝動すごくて。人に当たらない代わり、物を破壊するということに矛先が向いちゃうんで。すぐ壁とか殴っちゃうんで、壁とか穴あけちゃうの普通で。自分の部屋壁穴空いてましたもの。硬かったんですけど、殴っているうちにベコベコしてきて、自分の手を見たらすごい血滲んでるんで、ウェーみたいな。でもイライラしている時って痛覚麻痺するんですよね。まったく痛み感じないんですよ。アドレナリンが出ちゃってるのかな。後々になってすごい痛いんです。やるんじゃないかって後悔するんです。でもまたイライラしちゃうと、その時の反省がまったく生かされず。また殴り続けちゃう。(4、5時間粘られた時には)そのせいでご飯も食べなくて。食事はもともとあまり食べていなかったんですけどね。拒食が入ってきちゃってた。自律神経失調症になっていたのかも。今思えば。それから職員はあまり面会来なくなって。そっからは変わりましたね。

児相の支援としては短期間で行先を決定する必要があり、焦りを感じていたのではないかと推測されるし、児相の退所先としては家族の元へ戻るのが6割弱、施設入所が2割、里親委託は3パーセントにすぎないということからすれば⁽⁹⁾、施設に戻すという方向性が支援の選択肢として存在することは不思議な

こととはいえない。

しかし中村君にとっては虐待されて、辛抱に辛抱を重ねて来た施設生活である。そこへ戻るということは到底不可能なことであった。それとともに明確な意志をもって脱出して来たことを全く理解しない支援者側への強い抗議もあり、自傷行為に近い癇癢を起して暴れるという表現を取らざるを得なかったのであろう。一時保護所の基本的な任務は行動観察に基づく行動診断であり⁽¹⁰⁾、そこからしてもこのような反応が出るということを予測は出来たのではないだろうか。

また、面会を組むに当たり、一切本人に伝えずに実施されたことはやはり虐待的な行為であったといえよう。自己決定の機会が与えられなかったのは保護所側の知的障害というラベリングのせいである可能性も皆無とはいえない。

(6) 里親加藤さんとの出会い

① 里親が見つかる

ひかり学園に戻す、というアプローチに失敗したのち、児相は引受先として新しい施設を探すという方針を取った。しかしそれも困難だったのか、4、5ヶ月後から里親も同時並行して探すようになった。そして里親加藤さんが見いだされた。

加藤さんは現在中村君が利用しているグループホームの職員、30代後半の男性で、乳幼児のいる家族で生活していた。中村君が初めての里子である。宗教的背景があり、キリスト者で神学校に在学中、牧師としての生き方も並行して始めようとしていた⁽¹¹⁾。また、親が里子を預かっている等から児童福祉への関心が高かった⁽¹²⁾。加藤さん夫妻は中村君に面会しに来てくれた、という。そしてトライアルの外泊を決心する。

A 最初は新しい施設を探す、という方向で進んでたんですよ。4、5ヶ

里親との出会い

月経ってから同時並行で里親さんも探してたって、聞いて。見つかったって。里親さんとの出会いですかね。

F 初めて会った日、何か覚えていることある？

A 里親さん組んでた時は、(児相のワーカーは)Cさんに変ってたんですよ。Cさんが言うには、旦那さんは大人しげな感じで、妻の方はサバサバした感じだったよ。みたいな感じでした。それで会いに行ったら、どちらも予想外な感じでした。

F どんな風に予想外だった？

A 旦那さんが大人しそうというのがまず確実に嘘だった。確かに、見た感じは大人しそうなんです。なんでおとなしく見えたんでしょうね。奥さんの方がサバサバしてるっていうんですけど、結構雰囲気柔らかいんですよ。サバサバしてないじゃんみたいな感じで。

F 会いに行ったの。

A 会いに来てくれたんですよ。

F それが2000何年？

A いつだ？高2の時なんで。2年前くらい、2015年。そこで初めて会って、ワンクッション、一応お泊り行ってそこで決めようと(決心した)。

里親の平均年齢は40代から60代が約9割を占め、実子がない場合が7割を占めるので30代、乳幼児を抱えた加藤さんはかなり平均的里親像からはへだたりがある。また里子の平均委託時年齢は6.3歳であり障害児は2割とされるところから見ても、年齢が高く保護所生活が長く、情緒面での課題が指摘されていた中村君を引き受けることは、かなりハードルの高い里親志願ではなかったろうか。

② 外泊の体験一味違ったことのない「心地のいい暇」

外泊にと進んだ中村君は今まで体験したことのないような質を持った時間を

3日間、過ごすことになった。里親家庭で過ごす時間は「心地のいい暇」であり、今まで保護所で体験して来た「時間の流れの遅い暇」とは全く違うものだった。

F 3日間で印象的なことはある？

A 暇の形が違う。暇にも2種類あるんですよね。とにかく暇で、時間の流れの遅い暇というのと、心地のいい暇、時間の流れもすごい早くて、3日間はあっという間瞬間的に終わってしまいました。

F 心地のいい暇、って味わったことなかった。

A ないですね。施設内は、暇じゃなかった。学校から帰ってきたら、職員と目が合わないように、外でバスケ、家帰ってきて夕食、他の子が終わるまで待つ、その間子どもと話す。終わったら速攻テレビ。それか筋トレ。暇つぶしして、職員とは極力話さない。そんなこんなで、暇じゃなかった。暇は、あったけど、いても時間が長く感じるだけ。楽しくもなんともない状態で。

暇っていうほど、暇じゃなかったですけど。買い物に行ったり、里親さんの子どもと遊んだり。ちっちゃい子です。1歳になったばかりの。言葉もまだ喋らないとか。1歳未満かも。可愛かったですね。

そこからはスパスパ、決まっていった感じですね。「3日間どうだった」「良かった」でそのまま話がすごい進んでって、「じゃあ行こうか」って。荷物まとめようって、兎相でものをまとめて。里親さんのところに速攻で引っ越ししましたね。

決まってからは、里親さんが見つかったからは話の流れが速かったですね。

③ 愛情で人を殺せる人—はじめて愛を経験して戸惑う

養育里親の加藤さんは愛情に満ちた、受容的な人で中村君の表現では「愛情

で人が殺せる人」だった。親からも拒否され、施設生活で職員との関係性が非常に悪くて不信の中を生きてきた彼にとって生まれて初めての体験であり、どう対応していいのか分からない、気持ちの悪い、怖くて重い体験であった。彼は精神的なショックから夜も眠れなくなるほどだった、という。

F 里親さんに出会ったのは、中村君にとってどんな体験だったの。

A 里親さんは、危ない人ですね。愛情で人を殺せる人ですね。施設内では好かれていなかったんで。実際親からの愛もなかったんで。(中略)で、そこで受けたことのない愛をいきなり受けたんで、テンパりますよね。初めて愛を受けたという感じですね。今まで施設、児相、回って、施設で嫌な思い出しかない。愛なんか受けたことない、という状態だったんで。里親さんがすごい。最初怖かったんですよ。なんでこんなに良くしてくれるのみたいな。

なんかとても複雑でしたね。どう対応すればいいのかわからなくて。何、何、この後なんかくるんじゃない？みたいな。よくわかんない感じでしたね。気持ち悪かったです。今まで受けたことのないようなものを、いきなりきた。しかも少しじゃなくて、かなりどーんみたいな感じだったんで。

F 戸惑った？

A 戸惑いましたね。とにかく怖かったです。

F 怖いっていうのは、重たい、とか、どういう感じかな？

A 怖いし、重たいし。よくわかんない状態でしたね。

S うざったいの？

A うざったくはないんですよ。居心地はいいんですけど、その居心地の良さがよくわかんなくて。なんて言ったらいいのかわからない。頭ん中混乱している状態で。

F そういうインパクトなんだね。

A みんなそうだと思う。俺みたいな状態の人だったら、そういう感じになるんじゃないかな。本当によくわかんない感じでしたね。最初本当にびっくりしすぎて夜とか怖すぎて眠れなかったりして。よくわかんない状態でした。

加藤さんの愛情表現についてより具体的なことを筆者は聞いてみた。加藤さんはキリスト者であるという宗教的な背景から、まずはかなりダイレクトに「愛している」という言葉を口にする。その言葉は男女の恋愛関係以外では一般日本人はそれほど日常的に口にするものもない言葉であり、彼を大いに戸惑わせた。

F むちゃくちゃくすぐったいな、って思ったことある？

A 里親さんは、クリスチャンなんで、「愛している」って言葉は普通なんですよ。「僕は中村君のこと愛してる」とか。なんだこの人、えええ？急に何？みたいな。ビビりましたよ。鏡あったら自分のびっくりした顔にびっくりしましたね。

F 何の時そうなったの？テレビ見てた？

A そうですね。でもあの人流れ無視していつてくるんで。流れ関係ないんですよ、あの人には。流れとは自分で決めるものなんで。テンション高い人なんで。

より具体的には日常的な食事への配慮や中村君が転校した特別支援学校で暴れた時の対応のエピソードに見ることが出来る。

F それは、細かいことから？ご飯作ってくれるとか。

A 好きなもの何？とか。何か作るけど、何が食べたい？とか。何が食べ

たい、って今まで言われたことないんですよ。施設では、誕生日だから決めていいよ、みたいなかんじだったんですけど、その場合は何のイベントがあるわけでもなく、何を食べたい、どういうのが好きなの、どういうのが嫌いなもの、という感じ。嫌いなもの本当に出さなかったんで、びっくりした。グリーンピース、野菜が苦手で。(中略)好きな食べ物何？って言われた時も、自分で今まで決めたことってないんで、優柔不断で決めるのに時間がかかっちゃうんですよ。なんでもいいです、みたいな。あまり面白い人間ではなかったですね。自他ともに認めるつまらない人間ですね。優柔不断が染み付いちゃってるんですよ。ご飯決めるのはハードですね。

A (里親家庭に入った後も)学校では暴れました。転校して学校で暴れちゃいましたね。転校早々、人を殴りましたね。(中略)また、学校での生活が残りあと4、5ヶ月って頃、ガラス1枚割りましたね。学校で。自分でもびっくりしました。学校の扉が長めのがあって、横スライド式で、俺的には、手加減したんですけど、物を壊す必要ないな、と思って軽めに殴ろうと思って、コンってやったら、バキバキって。ガラスが飛び散らないようにシートが貼ってあったらしく、いっちゃって。思ったより力強かったらしくて。扉開けて出たら、ガラスめっちゃ刺さってて、痛い、と思って、保健室行ってガラス取り除いて、保健室の先生に、すごい怒られましたね。

F その時も何かぷつつり切れたの？

A ちょっとムカつく生徒がいたんですよ。自分のやったこと人のせいにする奴がいたんですよ。転校したばっかの時は、俺印象悪かったんです。目が怒ってる感じで印象悪いんです。それで気に入らなかったのか、人のせいにしてきたりとかして。それでその態度が積もり積もっていらっとして。……しちゃいましたね。

F 里親さんは、なんて言ったの？

A まず人殴った時は、まあ、そういうのもあるよね、と。多分学校で怒られていることわかっているんで。でガラス割った時は、怪我の心配先にしてきて。ガラス割ったこと怒るんじゃないんだ、と。

F 何やってんだ？

A 何やってんだって、言わなかったんですよ。帰ってきてすぐ、奥さんの方に、「今日学校でガラス割っちゃいました。」「え、手大丈夫？」「え？……う、うん」みたいな。

食事のエピソードについては、自己選択・自己決定という機会が施設生活では少なく、それが日常的になされることでの戸惑いである。暴れた時のエピソードについては、中村君は里親家庭では一度も暴れなかったが、転校した特別支援学校では転校早々気に入らない生徒を殴ったり、ガラスを割って暴れたりすることがあった。しかし、里親は中村君を叱らず、苛立つ彼を受容した上で身体の心配をしてくれた。問題行動→叱られるというパターンしか経験したことがなかった彼は、受容されて心配されるというパターンに大きな戸惑いを経験した。

④ 中村君から見た施設と里親の違い

中村君は施設と里親とは全く違うということを繰り返し語った。ひかり学園は家をモチーフにして小舎制で養護を実践していたが、職員と子どもの間には壁があり、そこからの風が冷たい、特に自分のように差別されている子どもにとっては壁が厚い、という。

F 聞いていて思うのは、よほど、児童養護の暮らしが過酷だよね。子どもたちを組織の中で管理していくということが、大人にとっては当たり前のことだけれど、子どもにとっては愛情の剥奪だよね。

A　そうですね。違うものですよ。家をモチーフにして施設を構成していますけれど、実際に行ってみると全然違いましたね。里親さんの価値観が違うんで、そこで違いが出るのかな、と思ったんですけど、空間が違いますよね。施設内で新しく家になった時とかは、小学生だったんでテンション上がりました。ですけど、空気がさめているんですよ。あったかいものじゃないですよ。職員と子どもの間に壁があるんで。薄い壁を子どもに気づかれない程度に張っているんで、その壁から風が冷たいんですよ。子ども同士はあったかいんですけどね。職員との間は。差別されている子とかは、壁が厚いんですよ。人によって態度が違うんで。

⑤ 中村君の変化

生まれて初めて受ける愛情を受け止め切れず、戸惑うばかりであった中村君は、当初長く里子として過ごすためには愛情を全部受け止めることは無理という結論を出し、愛情を受け止めながらもよい意味で流す、という彼なりの対処をとって里親家庭に馴染んでいった。

F　それで、愛情をもらって、A君は戸惑った？

A　戸惑いましたね。

F　で、どんな反応した？

A　あ、は、はい、みたいな。つまる感じでしたね。なんて返せばいいのかわからなくて。

F　戸惑って、それを受け止めていく段階ってあったの？どうやって慣れていったの？

A　流すようにしてましたね。受け止めちゃうと俺無理だったんで。流せる分は流して。俺が多分長く続くには、その方法しかないな、と。

F　今まで、職員からはあまり良くない干渉をされてきた。愛情があって

も、それもある意味、干渉ではないこともないから、気持ちは受け止めながらも流していく、対処の方法を取ったということ？

A そうですね。自分としては自分の出せるそれがベストかな、と。行為に対しておろそかにするわけではなく、受け取りはするんですけど、流れに任せて、ふわ〜っと、していました。もともと流されやすいタイプなんです。自分の推しに弱い、流されやすい、優柔不断、三拍子揃ってます。全部受け取るのは無理だな、と結論が出ている。

愛情を受け続ける中で中村君も心地よさを感じ、彼なりに加藤さんに対してなつき、心を開いて行く。

A あの人のいる空間はそれで満ち溢れている感じなんです。人に幸えを配るっていうかんじですか。大げさかもしれないけど、自分的には、それぐらい大きい出来事で。空間があったかかった、ていうか。なんかあったかいんですよね、空気が。暖房でもつけているわけでもないのに。ふわっとしてて。心地いいかんじで。すぐ寝れそう、というかんじ。ふかふかのベッドの上であったかい。熱すぎるわけではなくて心地よいあったかさなので、春の暖かさ。今までとは違う空気、空気の流れに乗って愛が届いているかんじ。少しでも優しくされたら、俺なついちゃうたちなんですよ。

また、彼は愛を受けることによって自己肯定感が生まれ、生きていてよかったと少しずつ思うことが出来るようになった。同時に対人関係も改善されてとげとげしい態度を取ることがなくなり、他者の話を聞くことも出来るようになった。その後、現在に至るまで児童養護施設から継続して見られたような、癇癪を起して暴れる行動はすっかり影をひそめた。

里親との出会い

S 今まで生きてきてよかったと思ってる？

A でも本当に、少しずつ思うようになってきている。里親さんのところで一番解放されたんだなあというのがあって。自分を支えてくれる人がいるんだなあ、と気づいた時に、「ああ、生きててよかったのかな」と。少しずつですけどね。

F 里親さんから愛情を受ける体験をして、自分が変わったことってある？

A 変わったこと。人の話聞けるようになったってことかな。

F すごいね。

(中略)

A 柔らかくなりました。丸くなりました。前までとんがってました。人の話をちゃんと聞くようになりました。何言ってんの、こいつ無駄じゃん、流されませんから、ととんがって流していたんで。前の(児童養護施設時代に通学していた)特別支援学校の先生とかに言われるのは、「大人っぽくなったね」、雰囲気が変わったのかな。生活の仕方が変わったからだと思います。居心地がいいところだからだと思います。前は自分は怒ってる感じのイメージがあって近寄りたいて言われていたんですけど。今は全然そういうことなくて。

F 自分に対するイメージが変わった？

A それはあまり変わらないですね。まあ、柔らかくなったんじゃないですかね。

中村君にとって里親家庭での経験は「育ち直し」であり、里親は里子である中村君の「社会化」を担う役割を果たしている⁽¹⁴⁾。中村君は児童養護施設で育った、切れやすい「とんがった」少年から、里親から戸惑いながら愛情を受ける経験によって「人の話を聞ける」「柔らかい」青年へと成長している上に、弱かつ

た自己肯定感も強められている。

里親家庭での経験のその他の特徴は

- a. 里親が無理に実親になろうとしないで「治療者里親役割」に徹している。
- b. 通常問題となるような里親子関係の成立するまでの「試しの期間」がほぼ見られない。
- c. 里親の持つキリスト教スピリチュアリティが関係形成の前面に出ている。
- d. 委託終了後もグループホーム職員として身近に里親がいて、継続して里子を支援する存在としての役割を果たしている。

a., b. 通常、親子関係を確立しようとして里親は努力し、育て直しにおいて「治療者の里親」の役割を取ったり、反対に愚直な親に徹して「治療者の里親を降りる」というような試行錯誤が見られるというが⁽¹⁵⁾、加藤さんは終始受容的態度で接し、治療者の里親の役割に徹しているように見える。また、中村君の側にも「試しの時期」と呼ばれるような、里親が受け入れてくれる人と分かると退行し、丸ごと受け入れてくれるかどうか試す時期が語りにおいてはほぼ見られない⁽¹⁶⁾。これらは一年間という短い限られた期間の里親委託であることが中村君と加藤さん両者に了解されたものであったし、中村君自身も年齢が高かったことにもよるのだろう。

c. 里親の、時に言語化された「キリスト教スピリチュアリティに基づく愛情」は中村君に大きな戸惑いをもたらしたが、ある意味理解しやすい、受け取りやすい形であったのかもしれない。ひかり学園は(曲がりなりにも)キリスト教主義であったし、里親の所属教会に出席し、彼なりの理解も深めてもいた。

d. 委託期間を終えても多くの場合、里親は委託児との関係を持ち続けるという⁽¹⁷⁾。中村君も1年間の委託期間を終えても里親を心の支えとしているし、「父母のような人」と呼んでもいる。

3 考察

中村君のこの時期についての「語り」の特徴は施設＝暗黒時代，里親＝満たされた幸福な時代，一時保護所＝中間時代というくっきりした色分けであり，過去に対しては「暗黒時代からの脱出(エクソダス)の物語」として語られていること，里親との出会いは劇的な変化・転換，ある種の「救いの物語」のように語られているところである。このこと自体，中村君がグループホームの支援を受けて自らの経験を語りなおしている証左であり，里親家庭での1年間を中心にアイデンティティーを再形成しているというしるし，である。

そのことを前提として含みつつ，彼の各時代の経験を見て行くと

(1) 特別支援学校入学後も，施設では相変わらずイライラした「困った子ども」であり続けた。彼の側からすれば，日常的な職員の強制に対して，違和感を抱きつつも上手く言語化できず，あるいは言語化する時間を与えられずに，暴れるという自己表現をするしかなかった「困っている子ども」としてあり続けた。特別支援学校での自由な生活が息抜きであり，そこでようやくとバランスを取っていたのであろう。

(2) 家族との再統合の支援が行われた形跡があるが，失敗した。本人は「知的障害」というラベリングのせいかもしれないと思っている。

(3) 幼少時にもあった盗みの疑いをかけられるという事件が「万引き事件」として繰り返されて，追い詰められた本人は突発的に施設を無断外出し，最終的に兇相に自らSOSを出して施設を脱出する。施設の側の「無断外出」という理解とは正反対に，本人が今までの生活環境に見切りをつけて脱出し，リセットしようとする自己決定の力，「ストレングス」を見ることが出来る。

(4) 一時保護所での1年間は施設に比べればストレスの格段に少ない生活であり，「暇な時間」として経験されはしたが，職員との関係も良好だった。そのことは一般的に管理性が強く刑務所のように，と表現されることのある保護所

の生活体験とは大きく異なっていて、一定の達成感や解放感が感じられる。

(5) 一時保護所での、児童養護施設職員による本人への帰還説得は見事に失敗した。兄相、保護所側は本人の意志決定による児童養護施設退所とは見ておらず、単なるわがまま、気まぐれとしか理解しないで説得を執拗に試みたように思われる。本人からすれば辛抱を重ねた上の意志決定であり、自傷に近い形での渾身の抵抗という形で表現するしかなかった。

(6) 里親は1年という短期の委託期間であることもあり、実の親子に無理になろうと試みることもなく、宗教性に基づいて本人を受容し、「治療者里親役割」に徹した。本人は当初戸惑いながらも里親の愛情を受け入れ、目立った「試し行動」に出ることもなく、信頼関係を形成する中で「育ち直し」「社会化」を経験していった。本人からすればここに至って初めて愛され、受け容れられる体験をする中で、心の支え、拠り所を得て安らぎを体験したのであろう。結果として自己肯定感の増大や対人関係の改善という大きな変容がもたらされることになった。

ここで得られた「心の支え」「拠り所」は具体的には契約解除後も里親の勤務するグループホームに居住し、日常的な支援を受けるという形で継続していく。次の段階における就労支援の困難にも、この拠り所なしには立ち向かえなかったであろう。

4 おわりに

児童養護施設の支援の中で虐待され、誤解されて「困っている子ども」が自らその環境を変え、一時保護所を経て里親との出会いの中で受容され、心の安定を得て変容していくという物語を本論では見て来た。

本論がソーシャルワーク実践に示唆するところは、

- (1) 暴れるなど情緒障害の傾向を示す子どもの場合、職員と子どものミクロな相互作用、つまり「やりとり」をしっかりと記録し、適切なスーパービジョンを受けることが必要であること。職員のかかわり方に課題があり、いわゆる「問題行動」を作り出している可能性がある。
- (2) 無断外出、暴れるなどの行動を単に一面的に「問題行動」として捉えないで、本人の意志や自己決定の発露という「ストレングス」として見ていく余地を残すこと。
- (3) 本人の物語、をきちんと理解した上で、物語に沿った支援をしていくことが重要であること。
- (4) ソーシャルワーク実践にとって基本的な価値前提であるところの「変化の可能性」(ゾフィア・ブトゥリム)⁽¹⁸⁾を再認識することが重要であること。

本論は里親研究や一時保護所研究等児童福祉分野に足を踏み入れているがその分野の文献研究、あるいは家族社会学の文献研究等には課題を残していることを最後にお断りしておきたい。

註

- (1) 前論文は「知的障害者」として生きることを何故選んだのか—ある青年の「語り」から—である。
- (2) 中村君は19歳、「軽度知的障害」とされている青年である。しかし、彼は言葉遣いも丁寧で語彙や表現力に優れ、趣味や興味関心も広く、社会的なスキルも高い。一般大学生とさして変わらない知的能力を感じさせられた。コミュニケーション面でも発達障害の傾向も感じられない。
- (3) クライアントが語ることによって自らの物語を整理し、語りなおしながら自らのオータナティブ・ストーリーを見出していくという支援である。今回の場合、中村君のイライラ体験に虐待という外在化された枠組みを積極的に導入し、「職員との関係の悪さから反抗していた自分」という物語から、「虐待を受けて当然なこととして怒っていた自分」としてのドミナント・ストーリーの書き換えに向けて介入がなされていた。荒井浩道(2014)ナラティブ・ソーシャルワーク、新泉社。
- (4) ナラティブではインタビューはインタビューの聞き手が語りの一翼を担っている相互行為のデータである、とされる。佐藤彰他編(2013)ナラティブ研究の最前線、ひつ

じ書房, p.7.

- (5) 山本智子(2016)発達障害がある人のナラティヴを聴く, ミネルヴァ書房, p.41.
- (6) 児童養護施設を無断外出し, 兄相で直に相談して退園して自立に向かうケースは少なからずあるようだ。以下は当事者の自叙伝である。福島茂(2015)キミはボク―児童養護施設から未来へ, 文屋刊.
- (7) 一時保護所は原則として2ヶ月を超えてはならないとされている。2017年度の全国平均在所日数は29.6日となっていることからして, 中村君の入所がいかに破格に長期に渡っていたか理解できるであろう。厚生労働省(2017)一時保護の現状について, 第13回新たな社会的養育に関する検討会, 参考資料 p.8.
- (8) 慎泰敏(2017)ルポ児童相談所: 一時保護所から考える子ども支援, ちくま新書.
- (9) 和田一郎編著(2016)児童相談所 一時保護所の子どもと支援, 明石書店, p.51.
- (10) 和田, 前掲書, p.81.
- (11) 里親となる人たちは海外の研究では宗教的動機に基づいていることが多く, 8割超が強い宗教的動機という結果の研究もある。日本では宗教的要因は強くはないが, 園井によれば里親家庭が宗教を持つ場合, 里父が宗教家である場合には児童福祉への理解から里親になるという特徴が見いだせる, という。園井ゆり(2013)里親制度の家族社会学, ミネルヴァ書房, p.156-159.
- (12) 児童福祉への関心の高さは厚生労働省調査でも最も高い。その内訳について調査した園井は宗教的理由(27.3%), 里親家庭の実子として育った(13.6%)を挙げている。園井前掲書, p.153.
- (13) 厚生労働省(2013)児童養護施設等入所児童調査結果, <https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11905000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Kateifukushika/0000071183.pdf>, 2019年9月21日閲覧。
- (14) 和泉広恵(2006)里親とは何か, 勁草書房, p.101.
- (15) 和泉前掲書, p.115.なお, 安藤(2017)は御園生(2008)による里親の親意識「実子養育型」「社会福祉型」「中間型」「模索・未消化型」の四分類を挙げつつ, それぞれの境界線は曖昧であり, 公私の間で立場性の揺れがあると捉えている。安藤藍(2017)里親であることの葛藤と対処―家族的文脈と福祉的文脈の交錯―, ミネルヴァ書房, P.103.
- (16) 里親子の関係が成立するまでの間に「見せかけの時期」「試しの時期」「親子関係成立の時期」と言った3段階を通るという。そしてこの試しの時期の親子関係の不調から里子と別れる場合が10-20%もあるという。森和子(2008)「家族として生活することの意義についての一考察―里子と親子関係を築けなかった経験を持つ里母の語りから」, 文京学院大学人間学部研究紀要10(1)p.49-p.68.
- (17) 園井, 前掲書, p.150.

里親との出会い

- (18) ゴフィア・T・ブトゥリム(1986)ソーシャルワークとは何か—その本質と機能—, 川田誉音訳, 川島書店, p.63.(原著Butrym, Z.(1976)The Nature of Social Work, Macmillan Press.)